

『平家物語』の本文批判：水平伝承と垂直伝承

著者	小西 甚一
雑誌名	日本語と日本文学
巻	15
ページ	1-28
発行年	1991-12-30
URL	http://doi.org/10.15068/00161951

『平家物語』の本文批判

——水平伝承と垂直伝承——

小 西 甚 一

前 白

わたくしは『平家物語』の本文批判について、わりあい原理的な考えを以前に発表した^①。もともと本文批判原論の基礎というつもりだったから、具体例に乏しいのを我ながら不満とする。このたびは、いくらか事実在即し述べてみたい。前稿の結論めいた要旨は、次のようにまとめられよう。

- (1) 流動志向本文は、その原本を明らかにすることが、本質的に不可能である。
- (2) わかるのは、原本からの系譜的な展開（垂直伝承）を捨象した、共時的な状態（水平伝承）だけである。
- (3) その焦点に「原態」（水平伝承本文の基本形態）を置く。それは、推定の可能な限界を示す描像にすぎず、具体的な本文系譜と結びつくものではないが、現存諸本の性質を理解するのに役だつ。
- (4) 原態を推定するには、^②a量的・^③b位置的・^④c質的と、三方面からの検討が必要になる。
- (5) 『平家』の原態本は、^⑤⑦日次記めいた政事誌・^⑥①唱導由来の語り事・^⑧②体験に根ざす合戦譚——の混成か。

(4)のうち、量的には、原態本がどの現存諸本よりも小さかった、つまり現存諸本すべてが増補本であることのほか、確かな知見は得られない(だから、現存諸本を「広本」と「略本」に両分するのは不合理。四部合戦状本や源平闘諍録本に顕著な削除・縮約の傾向を別にしても)。本稿では、位置的と質的の両方面から考えたい。

一 部分本文の位置関係

いまの『平家物語』研究では、語り系と増補系、あるいは語り物系と読み物系という区別がなされ、現存諸本がそれぞれの系列において生成したかのごとく説かれる。それは事実であろうか。これを位置関係から再検討してみよう。材料には、覚一本の巻十「首渡」から「千手前」までに当たる部分を採りあげる⁽²⁾。現存の主要伝本すべてに欠落が無い部分だからである。覚一本を基礎にしたのは、現今いちばん流布度が高いため、記事の要約もこれによる。本によっては、わたくしの要約とすこし違う事も出てくるが、小差は無視する。なお『源平盛衰記』を省いたのは、定着志向が顕著だし、純然たる視受用の本文と認められるからでもある。

	覚一本	八坂	屋代	南都	南異	長門	延慶	四部	闘諍
A									
(1) 一の谷にて討たれし平氏の首ども、都に入る(三三七)。	三三六	(1)	(1)	(1)	×	16 三三六—三三六	(1)	×	(1)
(2) これを聞き、維盛の北の方、悲歎(三三七)。	三三六	(2)	(2)	(2)	(1)	三三六—三三六	(2)	(1)	(2)
(3) 首を大路わたり獄門に懸くべきか詮議(三三七—三三八)。	三三六	(3)	(3)	(3)	(2)	三三六—三三六	(3)	×	(3)
(4) 範頼・義経の主張により、右の処置おこなはる(三三八)。	三三六—三三六	(4)	(4)	(4)	(3)	三三六—三三六	(4)	(2)	(4)
(5) 斎藤兄弟、維盛の首見え	(5)	(5)	(5)	(5)	(4)	(5)	(5)	(3)	×

[illegible]

なるべく小さい単位（「小段」）とよぶことにしよう）に分けたけれども、後述の位置的な相違を調べるためには、いくつかの

小段を進行の部分的な区切りとなる規模「大段」とよぶことにしたい）に併合するほうが扱いやすからう。覚一本に基づいて分けた箇条でいうと、次のごとくまとまる（標題はいずれも仮称）。

A 首わたし（1↓4）——討ち取った首の処置。

B 維盛の文通（5↓8）——屋島に在る維盛と京なる家族との文通。

C 院宣の送達（9↓11）——神器を返還すれば重衡の助命を考慮するという院宣が屋島へ送られる。

D 内裏女房との対面（12↓15）——重衡と関係のあった宮廷女官に会うことが特別許可。

E 院宣の拒否（16↓18）——院宣を拒否する文書が屋島から京へ送られる。

F 重衡の受戒（19↓20）——出家を願う重衡は、許可されず、せめてもと法然から受戒。

G 重衡の東国くだり（21↓25）——重衡は鎌倉へ護送される（主要箇所は律文）。

H 千手の慰め（26↓28）——頼朝は重衡に温情を示し、千手に歌曲などでなぐさめさせる。

おもな問題は、C……Fの位置関係に在る。

二 本文系統の成立要件

A↓BとG↓Hの位置関係は各本とも同じだが、C……Fはいちじろしい差異を示す。次のごとくである。

C↓D↓E↓F（覚一本・南都本・源平闘諍録本）

C↓D↓F↓E（長門本・南都異本・四部合戦状本）

C↓E↓D↓B（八坂系本・延慶本）

C↓E↓F↓D（屋代本）

これらのうち、同じ位置関係を共有するテキストについて、共通異文に基づき本文系譜を建設するのと同様な立場から

系統づけを試みることも、かなりの程度まで有効性が認められよう。しかし、この立場に従うと、従来の通説が成り立たなくなる。なぜならば、通説では、いわゆる語り系と増補系とを、

語り系——屋代本・覚一本（一方系本）・八坂系本

増補系——源平闘諍録本・四部合戦状本・南都本・南都異本・延慶本・長門本

のごとく分けるけれども、⁽⁴⁾大段の同じ位置関係を共有するテキストが、両系列にわたり出てくるゆえである。従来は共通な章段をもつだけで同じ系統と認められたようだが、他本の異詞章を恣意的に採りこむ流動志向本文のばあい、底本どりの書写を建前にする態度から生まれる「系統」とは同一視できない。流動志向本文の作編者が異詞章を採りこむのに、主として依拠する本の順序に合わせるのが順当だけれど、あえて違う位置に入れることもあろう。それは底本にわざと随わないのだから、その部分に関し「系統」が放棄されたわけである。同じ「系統」だというのは、共通な大段ないし小段が、対応する位置に在ることを必要としよう。

順序の前後だけではなく、ある大段がある本で欠くばあいても、やはり系統と必然的な関係がない。たとえば源平闘諍録本は、B「維盛の文通」とH「千手の慰め」ぜんたいを欠く。この本は、大段・小段を欠く箇所が多く（覚一本の17・21に当たる小段など）、縮約と増補を併用する方針の現われらしいけれども、BとHは同じに考えられない点がある。屋代本も正文にはHをもたず、巻十の目次に「但在別紙」と注し、全体の巻後に在る「平家抽書七ヶ条」の内に収められる（屋代・六〇七——一一）。この処置は、おそらく屋代本の主本にHが無く、他本で巻後に書き加えたことを意味するのであろう。源平闘諍録本と屋代本正文がHを共通的に欠くのは、やはり語り物系と読み物系の区別が系譜的に無意味であることを示す。なお、四部合戦状本はHをもつが、覚一本の26と28に当たる小段を欠く。これも真名本に共通な縮約方針の現われと考えることができようけれど、その背後には、どうせ付加部分なら、正文ほど忠実に採りこむ必要がない——という恣意性を潜めるらしい。

これらのほか、小段未満といえそうな短い詞章の位置変更もある。たとえば、G「重衡の東国くだり」で、池田の宿を出た重衡が、小夜の中山に向かうとき、いかなる宿業のゆえかと悲傷しながらも、

御子の一人もおはせぬことを、母の二位殿もなげき、北の方大納言佐殿も本意なきことにして、よろづの神ほとけに祈り申されけれども、その験なし。「かしこうぞ、無かりける。子だに有らましかば、いかに心ぐるしからん」と宣ひけるこそ、せめての事なれ(覚一・二五九—六〇)。

と述懐する。この条は、小異を伴うけれど、八坂系本(三三九)・南都本(七五三—五四)・長門本(17—二九)・四部合戦本(二〇六—〇七)は、覚一本(G23)と対応する箇所に出ている。この程度の分量だから、有無ということだけでは、流動志向本文のばあい、採りあげるほどの根拠になりかねよう。ところが、奇妙なことに、延慶本では、Hのあと「去十八日、在々所々ノ武士ノ狼藉ヲ可止之由……定長同ク頭弁ニ仰」に並べて、

サテモ中将ハ御子ノ一人モオハセヌ事ヲ歎給シカバ、二位殿モ無本意事ニ思ヒ、北方、大納言佐殿モ不斜歎給ケリ。神明仏陀ニモ折請シ給ヒキ。「賢クゾ、御子ノ無リケル。有セバ何ニ心苦カラマシ」ト、責ノ事ニハ被思ケリ(延慶・三三〇)。

とある。そのあとは、すぐ維盛の高野参詣となり、筋がまったく続かない。なぜこの所にこの詞句が在るのか、理解にくるしむ。伝誦のうち、この詞句が享受者の間で著明になっており、いまさら省くわけにゆかないと感じた編者が、とりあえずこの所に切り入れたのだろう——など説明することはできる。では、なぜ覚一本ほかの諸本と対応する箇所に出ていないのであろうか。それは、屋代本や、源平闘諍録本と同様、延慶本の底本にもこの詞句が無かったからだろう——と説明することもできる。こうして推理に推理を重ねる、いわゆる an inference upon an inference が有効性をもたないことは、考証理論の教えるところだけれど、それより重要なのは、このような推理をかりに有効だと認めたばあい、語り物系と読み物系の区別が無意味化する点だといえる(右の奇妙な位置変動が両系列と関係なく現われるため)。こう

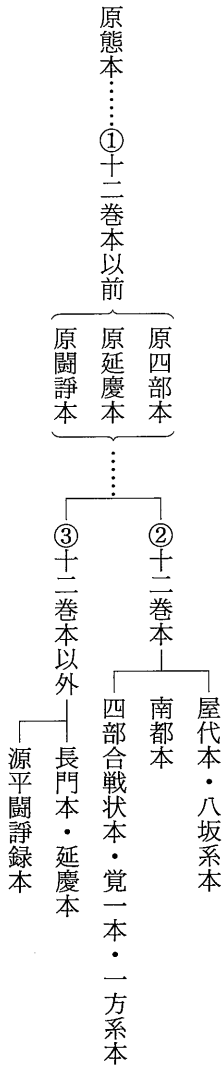
した恣意的な位置関係を捨象して、系譜が成り立ちえようか。

流動志向本文のばあい、語句を単位とする校異表がとうてい作れないので、系統を立てるためには、大段もしくは小段を単位とする対照が基本になる。この方法でシュミレーションを試みたところ、位置関係の恣意的な混態によって、系統化は不可能という結果が出たわけである。もし、位置関係をひとまず棚に上げ、大段や小段の内容事実だけに着目して、それらの異同や有無に基づき系統化することが有効性をもつならば（従来はこの方法が採られていた）、かならずしも位置関係を固執するには及ばない。しかし、前述のごとく、作編者たちが異種の大段・小段をわが依拠する主本と対応しない箇所に取りこんだのであれば、それは他本との混成を意味するもので、その他本がむしろ主本と別系統だということになる。また、主本の大段・小段を他本の位置に従って変えたのなら、主本自身の構成秩序を放棄したわけで、やはり同系統だとする根拠を失う。系統とは、共有される内在秩序の線条的な認識結果である。しかし『平家』のばあい、作編者は「秩序の再編成が作品の出来を良くする」という意味で位置関係を変えており、系統化の可能性は、十二巻本どうしを除き、期待できない。

流動志向本文は、一般的に、末期へ近づくほどだんだん定着性が加わってゆく。定着意識が『平家』本文に入りこんだのは、時期不明ながら、十二巻本の形成と相伴っていよう。すなわち、十二巻組織を大枠としてもつことにより、本文の定着化が流布本『平家』の方向へ進み、それと併行して、独自のな改変・増補を伴う十二巻本以外のテキスト、延慶本・長門本・源平闘諍録本なども形成された。ところで、系統づけは、ある程度まで定着志向をもつ十二巻本のばあい、ある程度まで可能性が認められるけれども、それ以外（およびそれ以前）のテキストに対する有効な手段がない。こうした基礎条件の違いを無視し、本文流動の全過程を一律に系統化しようと試み、しかも系譜法まがいの観点まで持ちこんだのが、従来の『平家』本文研究ではなかったか。

わたくしは『平家』本文の展開を当道系と非当道系とに分けて考察したことがある。⁽⁷⁾ 増補系とか読み物系とかいう名

称の不合理さを解消する点では、いまなお有効性をもつだろうが、本文を流動と定着の両面から跡づけるには役立たない。よって、これを修正し、①十二巻本以前・②十二巻本・③十二巻本以外というカテゴリイに基づいて考え直したい。この分けかたによると、いちばん顕著な修正として、四部合戦状本の所属が変わってくる。前説では、四部合戦状本を、原態本から当道系本・非当道系本になってゆく中間の過渡本として位置づけたが、新しい立場では、当然、十二巻本に属するわけである(南都本も)。もつとも、現存の四部合戦状本は十二巻本成立後のテキストと認めなくてはならないけれど、後述する政事誌ふうな叙述の濃密さは他本に見られないものであり、そうした性質は現存四部合戦状本に先行する同類テキスト(かりに原四部本と略称)から継承したと考えてよい。また、現存の延慶本における多量増補は、書写識語の延慶二―三年(一二〇九―一〇)ごろをあまり遡らないだろうが、その唱導性は現存諸本のどれよりも濃く、やはり先行の同類テキスト(原延慶本とよぶ)を承けていよう。さらに、源平闘諍録本は、それ自身を初期本文とは認めにくいとしても、基づくところ(原闘諍本と称しておく)は、東国独自の伝承を採りこんだ古テキストだったと認められている⁽¹¹⁾。これらと現存諸本との関係を略示すれば、



のごとくなる(「……」は継承性の不明を示す)。これは系統づけではない。他本から章段・大段などを恣意的に取りこみ、あるいは削除する流動志向本文のばあい、系統の共通性を立証する根拠が、十二巻本の内部を除けば、存在しないからである。できるのは、形態面の規準から本文の展開に分類的な整序を試みることであり、その基本線さえ確立されてお

れば、形態面以外の規準も参加する場が生まれよう。⁽¹²⁾

三 原態本と政事誌性

代表的なテキストの構成分析からいっても、伝本形成の過程からいっても、語り物系と読み物系とを系統論ふうな立場で主張する通説の欠陥は明らかであろう。系統論の立場は、原本(Original)ないし原型(Archetypus)をとらえ、それと現存諸本との親族関係を説明しようとするもので、十九世紀の文献学に郷愁を感じる向きは、原本・原型・系統などの概念に支えられない本文批判など、不信もしくは不安の対象でしかあるまい。しかし、原本や原型をとらえるのは例外的なばあいに限られ、本文系譜も正確には立たないのが通常だ——というのは厳然たる事実であり、この現実を無視した本文批判は観念の遊戲になりかねない。欧米の本文批判論では、原本ないし原型が不明なら、現存する複数の(時としては単数の)代表的なテキスト、すなわち族本(version)を対象とし、それぞれに合理的な校定(editing)を加える——という立場が主流である。⁽¹³⁾これは定着志向本文についての論だけれど、原理としては流動志向本文のばあいも適用されるべきだろう。

しかし、いくら現実重視とはいえ、源泉についての情報皆無なテキストを校定することは、頼りなさを感じさせずにはまい。そこで、原態本がどのようなテキストだったかを推定できるなら、校定をなるべく原態的な方向へ近づける扱いも期待される。前述のごとく、原態のうち、量的な面は、どの現存テキストよりも小さかったろうとしかいえず、また位置的な面については、とうてい推定が不可能である。しかし、質的な面だけは、かなり具体的な推定が成立しそうな手懸りに恵まれているらしい。

そのひとつは、多くの現存テキストにおいて、巻頭が年月日を示した政事誌ふうな叙述で始まることである。巻の分けかたは本ごとに異同があり、記事内容はかならずしも対応していないけれど、巻頭を上記の形式で始める点はだいた

い共通する。巻一は諸本いずれも「祇園精舎の鐘の声……」で始まるから別として、ほかは、

治承元年五月五日、天台座主明雲大僧正、公請を停止せらるゝうへ、藏人を御使にて、如意輪の御本尊をめし返いて、護持僧を改易せらる(寛一(巻二)・一四一)。

のような方式が原則になっている。⁽¹⁴⁾ もつとも、この原則の守られぐあいは、テキストにより忠実度の差がある。長門本はこの原則をあまりよく守らないが、それでも、巻頭を年月で書き起こさないのは全二十巻のうち八巻だから、長門本ぜんたいとしては右記のような方式が志向されていることになる。

これは、すべての『平家物語』伝本が、いちじるしい改修・改編をかさねながらも、作編者たちに「日次記めいた政事誌こそ、この作品を構成する重要な成分のひとつだ」という意識の強かった現われなのであろう。もちろん、巻頭の書き起こし方式だけから、こうした論が成り立つわけではない。佐々木八郎が、

『平家』が編年体の組織をもつてゐることも、またその叙述の中には記録が物語化した趣のもののあることも、或はまた殆ど純然たる記録に近いやうな記事が交つてゐることも、その因る所は作者がその原拠とした日記や記録の影響に在つたと思はれる。

と早くから指摘している⁽¹⁵⁾とあり、年月日を明記した政事関係の叙述が、じつは『平家』のなかでも、伝本のいかんに関わりなく、相対的に大きい部分をしめる。巻頭の書き起こし方式は、そうした政事的な題材への関心が、別な現われかたをしたものと認めてよい。

佐々木説は至当だと考える。もつとも、政事的な題材および日次記めいた叙述様式が『平家物語』生成のいかなる段階から存在するのか——という点について、佐々木説はかならずしも明確な見解を示していないけれど、わたくしは、原態本(その意味については後に再説する)の段階で政事的な題材および日次記めいた叙述様式が存在したはずだと推定したい。ふつう『平家』は軍記物語ないし戦記物語のひとつとされる。だが、その軍記とか戦記とかは、もし戦闘行動の

ルポルタージュと考えられるならば、作品の現実には合わない。作中の戦闘行動は、政治力学の冷厳な支配に従順でありえない平氏一族が、せめてもの抵抗として試みた、鷗外流に言えば「意地」の表出として描かれる。阿部一族の全滅が、殉死に関する武家の政道を要因とすると、平氏の衰亡も政治との関わりあい、具体的には朝廷の政策へどう対応したかを背景とする。その背景を描くのに、原態『平家』の作主(たち)は、公家の日次記とか政庁の公文書などを持ち出すのが有効だと考えたにちがいない。

寿永三年二月十四日付けの院宣が屋島の宗盛に届いた。添えられた重衡の私信に、母の二位尼は悲歎し、なんとか助けてやりたいと訴えるが、知盛の意見で拒否と決し、対院宣の返書を京へ送る。院宣も返書も共に全文が記載されている(EⅡ覚一・二四八―五三)。ところが、四部合戦状本では、院宣の文面を記載したあと、

十八日、在々所々可留武士狼藉之由、可被院宣之旨、藏人左衛門権佐定長承院宣、仰頭右中弁光雅朝臣。

同二十二日、諸国可留兵乱米之由、又左衛門権佐定長仰頭右中弁光雅朝臣(四部・九八―九九)。

とあり、同二十七日、使者の前左衛門尉重国が屋島から帰京し、宗盛の返書を届けた件だけ述べる。そして、覚一本その他のに見られる二位尼の愁訴とか宗盛たちの議論とかは、まったく出てこない。院宣の送達からその拒否にいたる経過を、心情および理路の衝突として描く覚一本などのほうが、筋の展開においても、情景の描写においても、物語ふうな興味の豊かさは四部合戦状本をずっと上廻るであろう。ところが、もし物語様式に拘泥せず、たとえば『史記』の文章に慣れた眼で見ると、四部合戦状本の構成は、むしろ覚一本などよりも迫力をもつ。

二月十八日・二十二日の記事は、平氏の党類が、院宣と詐り、兵糧と称して、五畿内・七道の土地管理者から収奪を続けていたけれども、近いうちに源頼朝の軍が平氏を撃滅するはずなので、武士たちの強請を停止させよ——という内容の宣旨が出たことを述べるだけの公務記録でしかないように見える。しかし、享受者すべてが平氏の敗亡という歴史的事実を知っているわけだから、この時点で平氏の非勢がすでに明らかだったことを効果的に印象づける。神器を返還

せよという院宣に対し、宗盛は強硬に拒否する（院宣も返書も文面は仮構の作だが）。宗盛の反論が強気であればあるほど、その直前に出ている十八日・二十二日の記事は、強気の虚しさを痛感させる。しかし、両日の件を、南都異本・長門本は重衡受戒と院宣送達の間（E15↓F16・E16↓F17）、延慶本は千手摂待（H28）の後に出している。四部合戦状本のごとく、院宣を受諾するか拒否するかという瀬戸際に在ってこそ、地方で平氏の勢力が駆逐されてゆく状況は、背景として強い印象を与えるけれども、重衡や維盛の個人的な行動に対しては効果が乏しい。すなわち、文藝的な興味に欠ける政事誌ふうの叙述でも、四部合戦状本に見る類の使いかたなら、生きいきしてくる。原態本に在ったはずの政事誌ふうな叙述は、こうした意味あいだったろう。

もつとも、現存の『平家物語』諸本に見られる政事誌ふうな叙述が、すべて原態本から出たもので、それらの記事を欠く本は、興趣に乏しいため削除したのだろう——ということにはなりかねる。南都異本は、宗盛たちが院宣拒否の返書を京へ送った条（E18）の後、重衡を義経の宿所へ移した条（E18）の後、重衡を義経の宿所へ移した条（G20）の前に、政府から頼朝あて送達した「平家所知事」と題する公文書を載せる（南異・一〇七九—八二）。これは、平氏が数百箇所の領地から収入を得ていたけれども、証拠文書の紛失などで領有権の不確かになったものが多いから。東国の所属不定地ともども頼朝の処置に任せる——という要旨のもので、長門本も南都異本と対応する箇所に見えている（G20・二六—二七）。宗盛たちの強硬な拒否が、じつは虚しい抵抗にすぎなかったことを印象づける点では、さきの二月十八日・二十二日付け宣旨と同様な効果を示す。延慶本では、この「平家所知事」が重衡を義経の宿所へ移した条（G20）の後、重衡が東国へ護送される条（G22）の前に出ている（延慶・三一〇—一二）。これは、院宣の拒否という公的な行動を直接受けるのではなく、重衡個人の悲境に対する背景をなすので、長門本や南都異本ほど効果的ではないが、ある程度のはたらきをもつ。それにしても、その分量は問題であろう。翻印の延慶本（注2参照）で二十四行にもわたる長文が、はたして原態本に存在しえたかどうかは、むしろ否定的な推測へと傾く。

十二巻本のおそらく半分ていど（またはそれ以下）だったろう原態本のなかに「平家所知事」が存在したと仮定すれば、不均衡の至りと考えられる。十二巻本でさえ大多數のテキストが「平家所知事」を欠く事実は、作編者たちが量的な不均衡を感じたのも、ひとつの理由だったろう。これら公文書の類だけでなく、十二巻本に出ている政事誌ふうな記述も、すべてが原態本から採ったものだと考えにくい。それらの少なからぬ部分は、十二巻本の形成過程における増補と推定できよう。これについて重要なのは、そうした増補のおこなわれた根拠である。原態本で政事誌ふうな叙述がおそらく量的にも質的にも顕著な存在だったから、後出諸本の作編者たちがそれと同質な記事を増補できたのであり、もしそうでなければ、物語的な興趣をいちじるしく減殺する「平家所知事」の類があえて採りこまれることはなかったろう。この推定は、しかし、それらの政事誌ふうな叙述が、原拠となった公家の日次記を忠実に写すだけのものだったことまで含意するわけでない。したがって、公家の日次記との一致度が高いものほど古態を多くもつ——という類の論理には、むしろ反対したい。公家の日次記などに現われる事実はあくまでも材料として使われたのであり、重要なものは日次記めいた述べかたから生れる史実らしさにほかならない。⁽¹⁸⁾ さきに「政事的な題材および日次記めいた叙述様式」を原態本に想定したのはその意味である。

四 唱導性と本文の揺れ

このように見てくると、あたかも『平家物語』は政事誌ふうな題材が本来のもので、唱導的な成分は後から参加したと主張しているかのごとく取られかねまい。逆に、唱導性の先行を認める立場も有りうるけれど、両者の正しさを立証する資料・手段、ともに無い。では、われわれは、この問題から手を引くべきだろうか。十九世紀ふうの実証主義に従うかぎり、そうするのが正しい。しかし、客観的な事実がわれわれと関わりなく既に存在しており、その事実を確かな証拠と適切な推理とから把握するのが実証だ——という立場をしばらく括弧に入れ、われわれと関わることにより、は

じめて事実が事実でありうる——という二十世紀の考証理論を採りあげるなら、どう考えられるか。まず『平家物語』とはなにか——が問題になる。わかりきった事と言われるかもしれない。冒頭を「祇園精舎の鐘の声……」と語り起こし、朝廷および源氏と絡みあう平氏の興亡を多くの挿話まじりに述べ、六代が切られて平氏の正嫡が絶えるまで（または女院の御往生まで）をまとめたのが『平家物語』だ——とは、たぶん確立されたといってよい現代の共通認識であり、わたくしも異議はない。だが、その共通認識を確立させたのは、数世紀にわたる享受者の参加が有った結果で、制作者の側だけからは決まるわけがなからう。

誰でも『平家』といえばまず頭に浮かぶのが「祇園精舎の鐘の声……」であって、この語り起こしを欠く『平家』は考えられない。ところが、この語り起こしは、明らかに唱導の文体であって、いま『平家』だと認知されている作品の成立に唱導者（説経師）が参加したことは疑いない。もちろん、語り起こしの文体だけで右のごとく断定するわけにはゆかないが、他にも唱導特有の文体をもつ部分が出てくるし、ある宗派の教義や寺社の本縁などもしばしば語られる。それらは、もし『平家』が平氏の興亡を述べるための作品だとすれば、よいいな刺説でしかない。それが平然と繰り返されるのは、唱導者の関与を考えるよりほかに、説明がつかないであろう。さらに『平家』が多くの挿話、たとえば「祇王」「小督」「横笛」の類をもつことも、やはり唱導から来たものにちがいない。説経では、講理の助けとして、仏や菩薩の前世譚とか世間の俗事談とかを介在させるのが常用手段であり、因縁譬喩（略して「縁喩」とよばれた。これらの縁喩は、補助的な役目のものだから、有っても無くてもよく、かなり変化ないし伸縮を加えてもよい。こうした縁喩の性質が『平家』の挿話にも継承されている。

このような可変性の許容は『平家』の本文に大きい特色を与えた。もうひとつの特色たる政事誌ふうな叙述は、抛り所にした公家の日次記と違わないことが望ましい。ところが、唱導ふうな表現意識の入りこんだ結果か、現実が起こった事件を素材としながらも、諸本まちまちの語りかたになっている例が少なくない。犬井善寿^{よしひさ}によつて指摘された「殿

下乗合」が、代表的なものであろう。²⁰ 嘉応二年十月十六日、鷹狩りの帰途、平資盛は、摂政藤原基房の行列と行き違い、礼を失したので、懲らしめられる。これを聞いた祖父の清盛は怒り、同月二十一日、武士たちに命じ参内途中の基房一行を襲わせ、基房や従者たちは、さんざんな目にあう(寛一・一一六—二〇)。史料によると、資盛が懲らしめられたのは七月三日であり、報復を命じたのは重盛であった。七月のことを十月にしたのは、報復までの間を短くするほうが事実よりも事実らしいため、清盛を悪役にしたのは、重盛を忠孝両全の賢人に造形する必要からだ——と従来いわれており、定説と認められよう。犬井が問題にしたのは場所のことで、十月十六日の件は、

京極大路六角—南都本・長門本・延慶本・四部合戦状本

大炊御門大路—大宮—源平闘諍録本・堀河—屋代本・堀熊—寛一本・堀河猪熊—八坂系本

といったふうに異なる。京極は内裏からずっと東寄りで郊外に近く、大炊御門と堀河ないし猪熊の交叉する辺は内裏のすぐ傍であつて、両所はそうとう隔たつてゐる。

二十一日の件は、

中御門大路—堀河猪熊—南都本・長門本・延慶本・寛一本・堀河—屋代本

大炊御門大路—猪熊—四部合戦状本・源平闘諍録本

となつており、中御門大路とするのが、いわゆる語り物系のすべてと読み物系の数本、大炊御門大路とするのは読み物系の両本である。基房の行く先は内裏の直廬^{じきろ}だから、中御門大路を通つて待賢門から入る前者のほうが、大炊御門大路を経て郁芳門から内裏へ入る後者よりも、距離的にいくらか近い。この作中場所を十六日の件で語り物系諸本が読み物系諸本よりも内裏に近く設定しているのと重ね合わせるとき、作編者たちの表現意識が「内裏へいつそう近く」を志向したことの現われだと認められる。それは、内裏への物理的な距離だけではなく、十四世紀ごろにおける作編者たち(あるいは享受者たち)の皇室に対する心理的な接近をも反映するのであろう——。以上は犬井説の要約で、従うべきだと考え

るが、重要なのは、基幹モチーフさえ守っていれば、作中の時間・場所・人物などを改変してもさしつかえないという意識の存在である。こうした「語り変え自由」の意識は、唱導者の関与を想定するとき、いちばん無理なく納得されよう。

さまざまな挿話が頻出し、しかも多少の相違を気にかけていないことは、現存本のすべてに見られる事実であり、これを『平家』の本性的な特質だと認めるならば、唱導者の関与が『平家』の本性を決めたわけである。別な角度からいうと、唱導者の関与する以前には、われわれが『平家物語』と考える作品は無かったことになる。原態『平家』以前（以外）にも、平氏の興亡に関する文書が多く存在した。九条道家の日記『玉葉』に「平家記事、仰遣光盛卿許。彼卿多持平家也」（承久二年四月二十日）とある。この「平家記」は、おそらく政事誌ふうな記録で、いまの『平家物語』とは別ものだろうと言われる。そして、これら「平家記」の類を材料とし、平氏の興亡を編年記ふうにまとめた作品が有ったかもしれない。だが、それは『平家物語』ではなく、唱導に根ざす流動的な本文の形成されたとき、はじめて『平家物語』になったのである。なにが『平家物語』か——を決めるには、整版印刷で享受できるようになった江戸人（とわれわれ後代人）の流布本意識が不可欠であり、覚一本も延慶本も長門本も知らなかった原態『平家』の作主（または編者・作編者）だけでは最終的な決定の権限が無い。

流布本こそいちばん『平家』らしい『平家』だという立場から、なにが『平家物語』か——を考えると、どうしても看過できないのは、勇壮あるいは悲壮な合戦場面である。小林秀雄に、これが『平家物語』の精髓だと錯覚させたほど印象的な合戦場面ぬきでは、とうてい『平家』の論とはいえず、当然、原態本にはこうした合戦場面が無くてはならない。繰り返すようだが、これは、原態本に合戦場面が有ったはずだと推測できるだけでなく、有力な合戦場面を欠くなら、原態『平家』以前の類似作品にすぎないとする資格論ふう観点にも立つ。それが、いかなる経路で、いかなる人物により原態『平家』に持こまれたかは、根拠となる資料を欠くので、推理のしようがない。推測だけならば、東国地

方へ進出していた安居院流の唱導者が武士たちの戦場体験談に接し、その語りぐちを『平家』に持ちこんだのだろうと考えることもできる。佐々木八郎が早く指摘したごとく、合戦場面に「弓杖を突く」「手綱をくれて歩ます」「よつぴいてひやうど射る」などの武者ことばが頻出するのは、それを直接に聴いた者が媒介したと考えるべきだろう。その媒介をしたのは、東国の唱導者である可能性が多い。これは、あくまでも推測の域を出るものでなく、他の事を論証するときの根拠には使えない。だが、原態『平家』と唱導の関わりについては、

平曲以前の琵琶法師が説経師に倣って種々の説話を語ったものが『平家』の資料になったり、或は説経師の表白や語り物もまた『平家』の中に採り入れられたであらう。

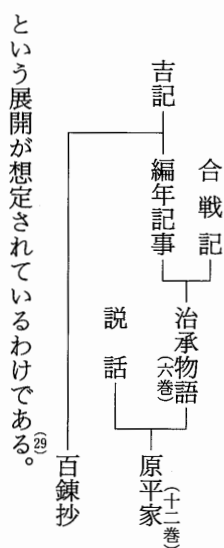
という佐々木の意見が、いまなお動かさないはずである。

五 原態本と十二巻本の関わり

日次記めいた政事誌・唱導由来の語り事・体験に根ざす合戦譚——の三者が原態『平家』に在ったはずだという仮説は、どれかひとつが後出の要素であつても、成り立たなくなる。その意味で、政事誌ふうな叙述に吉田資経が直接関与していたらうという武久堅の説は、大きい問題を提供する。武久説は昭和四十六—四十八年に発表されたが、四十六年論文⁽²⁵⁾では、延慶本「静憲法印法皇ノ御許ニ詣事」(第二本三十一・三二—三二五)を採りあげる。鳥羽殿に幽閉された後白河法皇の身近く奉仕する「尼前」(以前の女房名「左衛門佐」)が、ほとんどすべての記録や日次記で誰か不明なものにも拘わらず、資経の『自曆記』によれば、かれは建久九年十月二十四日に「故院女房尼右衛門佐」から昔の回想を聞いたと述べる。この「女房尼」こそ、年齢・出身・経歴など、いずれも延慶本の「尼前」にふさわしい。また、延慶本には吉田経房(資経の祖父)が文案の担当者となつた官符・宣旨など四通を載せるが、そのうち二通は『吉記』(経房の日次記)にしか出ていない。これらの事実から、資経を『平家』作者のひとりらしいとした武久は、昭和四十七年論文で、政事誌

ふうな記事を現存史料と照合した結果、おそらく『平家』の本文成長には『吉記』を参酌して編集された時点が有ったろうと認め、さらに昭和四十八年論文では、いわゆる勧修寺一統の人たち、吉田為房・経房・定長(経房の弟)などが、さまざまな作中場面に登場し、しかも少なからず箔を付けてもらったような書きぶりである点から、資経の制作関与を主張している。

これと併行する時期に、平田俊春は『平家』の政事誌ふうな叙述を典拠の面から精査し、その成果が平成二年にいたり大著『平家物語の批判的研究』として刊行された。平田説も『吉記』を基本典拠と認める立場は共通だけれど、それが全面的であり、かつ他の史料を使っていないとするのは、新しく明らかにされた点である。つまり、現存の『吉記』は少なからぬ欠巻および脱落箇所があるため、すべてが『吉記』に依拠しているかどうか、直接にはわからない。しかし、平田は『百鍊抄』が『吉記』を抄記したものであると考証し、現存の『吉記』には欠けている箇所でも、該当する記事が『百鍊抄』に出ておれば、それは完本『吉記』にも在ったはず——という見地から、政事誌ふうな箇所すべてを史料と照合する。その結果、従来よく言及された『玉葉』や『山槐記』等には依拠しておらず、欠落前の『吉記』だけに基づくことが判明した。この事実により、平田は、政事誌ふうな編年記事が『吉記』に近いほど「原平家」の姿を多く保存すると考える。かれのいう「原平家」とは、現存の『平家』諸本に基づき復原推定される原形本を意味し、御府本『兵範記』裏書に「治承物語六巻号平家」と見える類ではない。つまり、



という展開が想定されているわけである。²⁶

この平田説における重要な論点のひとつが、いわゆる「原平家」の性格規定である。従来も「原平家」という語はしきりに用いられたけれど、定義を欠いたので、そのテキスト像はきわめて不明瞭であった。人によっては、信濃前司行長が作詞して生仏に語らせた『平家』を考えるようだし、ある人は、六巻本『治承物語』を念頭に置いたろうが、いけばん多かつたのは、たぶん「現存諸本よりも先行する初期的な『平家』テキスト」ぐらいの漠然たる観念ではなかったろうか。そうした漠然たる「原平家」を規準とし、それに近いのが古態だ——などという議論は、そもそも考証の態をなしていない。これらに比べ、平田が十二巻の「原平家」を設定したうえ、古態性の認定規準を『吉記』との一致度に求めたことは、方法論として大きい前進である。これと併行する時期に、武久も「初出十二巻本」という概念を提出している。³⁰ 現存の『平家』諸本を批判するばあい、当面の対象は、十二巻本の親本であるほかないから、この目標設定は、平田説と同じく、方法論的な前進を示す。

しかし、平田説と武久説とは、同じく十二巻の『平家』親本を目標にしながらも、それ以前の本文的な特色について見解が異なる。平田説は、前掲のチャートが示すごとく、最初の段階から『吉記』が本文に採りこまれていたとし、唱導ふうな要素が加わったのを六巻本の段階とするらしい（『説話』が唱導説話を含むものとして）。これに対し、武久説では、資経（二一八一—一二五二）が天福二年から建長三年の間（一二三四—五二）に『吉記』を採りこんだものと認め、それは「第一次延慶本をもとに、第二次延慶本即ち現存延慶本の編著を完成したと考えることができる」という（昭和四十六年論文・一〇二ページ）。ところで、この論文を『平家物語成立過程考』（昭和六十一年刊）に収録したとき、該当する箇所を「資経がその出家期間に、六巻本をもとに、初出十二巻本の編著を完成したと考えることができる」（同書・三三三—三四ページ）と言い換えてある。後者に従うならば、初出十二巻本の段階で『吉記』が採りこまれたわけだから、同じく十二巻本といっても、平田説とは条件が違う。

政事誌ふうな叙述が『吉記』から採りこまれた時期を立証する方法は、いまのところ無いと考えたい。いくらでも推

定はできる。だが、立証を伴わない推定は、話題以上の存在理由を欠くであろう。したがって、最初の段階から『吉記』が参加していたろうとする平田説には、賛成も反対もいたしかねるけれど、もし将来なにかの史料が新しく現われ、初出十二巻本の段階で『吉記』が参加したことを立証できたと仮定しても、最初の『平家』が日次記めいた政事誌と無縁だったことにはならない。後の段階で『吉記』が採りこまれ、また四部合戦状本のようなテキストが生まれたのは、最初の段階に政事誌ふうな要素が含まれており、その要素を強調した結果だと考えるとき、いちばん自然な推論になるであろう。さらに、武久説のごとく資経が初めて『吉記』を採りこんだと推論することも、じつは立証を伴うものではない。資経が『吉記』を採りこんだのは事実だとしても、それ以前に誰か『吉記』を採りこんだ者があり、資経はそれを拡大したのだろう——という仮想は、立証できないから、たんなる仮想にすぎないけれど、資経が単独で『吉記』に対応する記事すべてを書いたとするのも、立証できない点では、右の仮想と等価なのである。確かなのは、多量に『吉記』が採りこまれている事実だけであろう。

武久説では、前述のごとく、初出論文の「第一次延慶本」「第二次延慶本」をそれぞれ「六巻本」「初出十二巻本」と収録単行本で言い換えている。後者の本文でも注記でも、この相違になんら言及されていないから、初出十二巻本とは現存延慶本のことだと受け取られてよろしかろう。だが、じつは、そうでないらしい。現存延慶本が『吉記』との照合資料に使われてよいか否かを『平家物語成立過程考』では、

手懸りを現存延慶本の本文に求めるが、論点とする『吉記』参酌の時点に重なっているとは限らず、むしろ「初出十二巻本」の成立過程に遡り探究されることになるであろう(二九一ページ)。

と述べてあり、現存延慶本は、いわゆる初出十二巻本よりも後出だということになる。こうした不整合が生じたのは、初出十二巻本を延慶本の線だけで考えようとした余波かもしれない。ある程度まで六巻組織のおもかげを残しながら、実質的に十二巻組織なのは、延慶本ひとつである。しかし、四部合戦状本の十二巻組織が延慶本のいかなる段階と対応

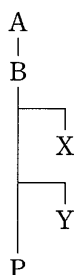
するのか、十二巻組織の形成と『吉記』の採りこみは理由ある関連か偶然の併存事象か……等を明らかにしがたい現在、初出十二巻本と資経を直結するのは尚早であろう。ましてや、最初期の『平家』で日次記めいた政事誌が要素のひとつだったろうという推定に対し、反証となるわけではない。

原態『平家』におけるもうひとつの要素、唱導由来の語り事が、もし平田説のごとく六巻本段階で加わったとすれば、わたくしの仮説は、しばらく保留を要する。だが、平田説は、唱導的な要素の後出を明確に論証してはおらず、たんに『吉記』が最初期から加わっていることを主張するだけなので、わたくしの仮説に対し、やはり反証を提示するものではない。平田説へのいちばん有力な支証となった四部合戦状本でさえも、唱導ふうな詞句が少なからず採りこまれている事実は、日次記めいた叙事が唱導ふうな詞句とあまり違和感を伴わずに共存できたことを示す。武久は、唱導ふうな詞句（表白句）が延慶本・長門本・四部合戦状本に共有されるばあいは、かならず『源平盛衰記』にも継承されている事を挙げ、それらの表白句を「読み本系の祖本時代から本文に組み込まれていたもの」と認める。³²その「祖本時代」は、初出十二巻本時代をさすのであり、序章の「祇園精舎の鐘の声……」も、その時点で加わったものだろうとされる。³³武久説によっても、わたくしの仮説はいちおう保留せざるをえなくなる。だが、それは、保留を要するということであり、成立しなくなるわけではない。

わたくしのいう原態本は、前記三種の要素をもつ『平家物語』だけに関わるもので、形成の時期を捨象している、いわば水平伝承の次元に属する概念だから、どの時期に「祇園精舎の鐘の声……」が加わったかを問題にする替わり、逆に「祇園精舎の鐘の声……」をもつ本文だけが『平家物語』なのだと認め、それ以外は『平家物語』の類似作品だということになる。その原態本が六巻組織だったか十二巻組織だったかは、立証の方法が無いのだから、具体的な形成時期の問題と共に、未詳とするほかあるまい。だが、十二巻本『平家』を本文批判の焦点として持ち出した平田説・武久説には、重要な意義ありと考えたい。それは、十二巻本の『平家』が、それ以外の『平家』とは違い、垂直伝承の要素を

多くもつようになったと認められるからである。わたくしは、何某系統という呼称をなるべく避けてきた。垂直伝承との混同を顧慮したゆえだが、十二巻本の『平家』については、かなり垂直伝承の要素を認めるのでなければ、適正な本文批判が期待されにくい。

垂直伝承とはいっても、定着志向本文における系譜法どおりを当てはめるわけにはゆかない。たとえば、先行本文Aが書承されてB本となるばあい、A本—B本は、ひとつの系統をなす。ところが、そのあと、異伝本XおよびYから採った部分本文をB本に切り入れ、混合本Pが生じたと仮定しよう。つまり、



のような関係だけれど、もしA—BのPに対してもつ比較的な本文特性が内質・分量・形状にわたり優勢ならば、P本はA—B系統であつて、X本・Y本とは詞章の貸借だけがなされたことになる。ところが、従来は、X本ないしY本と内質のうえで共通な章段或部分本文（大段）がP本にあれば、X本またはY本がP本と同系統であるかのごとく扱われがちであつた。だが、それは、貸借関係と継承関係との混同にほかならない。継承関係を確かめるには、共通詞章の有無だけでなく、形状的な対応関係も加える必要がある。さきに述べた大段・小段の位置はそのひとつだが、それより大きい単位での構成されぐあいを含め、形状とよぶことにすれば、内質・分量・形状にわたる対比が継承関係すなわち系統を考える有効な手段となる。その有効性が、しかし、十二巻本のばあい少なくともいのに対し、それ以外（ないし以前）のテキストにおいては認めがたい。後者のばあい、垂直伝承としての系統は立ちえず、したがって十二巻組織が『平家』の本文批判においてもつ意味は大きい。

十二巻本以外の『平家』については、系統づけを放棄し、水平伝承の立場で本文を批判するよりほかない。それは混合本を是認する立場である。池田亀鑑の主張を表層的に信奉する向きは、混合本という名を聞くだけで嫌な顔をしたが

るけれど、混合本には、それなりの良さが無いでもない。系譜法で志向される原型は、現存諸本の分岐点となったひとつのテキストなので、ほかにも原態本から派生した未知のテキストが有りえよう。混合本は、混合本なるがゆえに、それらの失われたテキストが含有される可能性をもつ。その代表的な事例が『平家』にほかならない。意識的な混態をもつテキストのばあい、系統づけは不可能だが、異伝の分類なら、かなりの精度が期待される。その先駆的な業績が山田孝雄の『平家物語考』で、本文の形態面に基づいて諸本を分類した。これは、章段単位の有無を規準としており、たとえば流布本の「祇王祇女」「無文」「燈爐」「竹生島詣」を長門本と四部合戦状本のいずれもが欠く事から、両本の共通性を認めながらも、前者に有る「辻風」「文覚荒行」「青山沙汰」が後者には無い点などをも考慮したうえで、両本が「近き縁故ある本なることを想像しうべし」と認める(四七―七四ページ)。この条を収める章は「諸本の系統上の関係を論ず」と題されているけれども、じつは「系統」という語の用法が当時はまだ確かでなく、説かれるところは分類を出るものではない。

山田説をさらに精細化した労作が、高橋貞一の『平家物語諸本の研究』(昭和十八年刊)である。かれは、章段の有無だけでなく、その中に含まれる部分的な記事(わたくしのいう大段に相当)も批判の規準に加えた。たとえば「二代后」のなかで、則天武后の事をかなり詳しく語るのが八坂系甲類本における特色のひとつだと指摘したなど(二七・六〇・九二・二〇四ページ)。本稿の第一―二節で大段・小段に基づく分析を試みたのは、高橋説の延長線上に在り、それに位置の要素を加えたものである。このように精細化しながらも、高橋説は、分類の立場を堅持しており、その点では山田説より明快だといえる。戦後、ラハマンふうな系譜法が流動志向本文にも混入したゆえか、しきりに系統が論じられるようになったけれど、それが十二巻本以外(ないし以前)の『平家』について有効性をもたないことは、上述のとおりである。われわれは、山田―高橋説まで立ち戻り、そこから出直すべきだと考える。

《注》

(1) 小西『平家物語』の原態と古態——本文批判と作品批評の接点——(『日本文学の特質』明治書院・平成三年七月刊)に初出収録。

(2) 下欄の(1)(2)(3)……は、各本における大段の順序を示す。たとえば、長門本で(14)の次に(17)が出るのは、覚一本・八坂系本・屋代本の(12)に当たる大段が、長門本の大段(17)になっていることを意味する。あるテキストの欠く大段は×印で示す。〈別〉は諸本とひどく違う箇所にあること、延慶欄の〈24〉は上欄の〈伊豆〉に対応することの意。漢数字は所拠本のページを表わす。所拠本は次のとおり。

覚一本 日本古典文学大系〈32—33〉(岩波書店・昭和三十四年二月—三十五年十一月)。高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦校注。

八坂系本 〔八坂本平家物語〕〈全一冊〉(大学堂書店・昭和五十六年六月)。山下宏明編。

屋代本 〔屋代本平家物語〕〈全三冊〉(桜楓社・昭和四十二年六月)。佐藤謙三・春田宣編。

南都本・南都異本 〔南都本／南都異本平家物語〕〈古典研究会叢書第二期・全二冊〉(汲古書院・昭和四十六年十月—四十七年一月)。松本隆信解題。

長門本 〔岡山大学本平家物語二十卷〕〈全五冊〉(福武書店・昭和五十年十月—五十二年十一月)。岡山大学池田家文庫等刊行会編。

延慶本 〔延慶本平家物語本文篇〕〈全二冊〉(勉誠社・平成二年六月)。北原保雄・小川栄一編。

四部合戦状本 〔四部合戦状本平家物語〕〈全三冊〉(大安・昭和四十二年三月)。慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編・松本隆信解題校定。

源平闘諍録本 〔源平闘諍録と研究〕〈全一冊〉(未刊国文資料刊行会・昭和三十八年三月)。山下宏明編著。

(3) この件を、長門本や『源平盛衰記』では、宗盛の行動とする。〈別〉と示したのはその意。

(4) 渥美かをる説(『平家物語の基礎的研究』(三省堂・昭和三十七年三月)五四—六五ページ)による。ただし南都本は、渥美自身も語り系との接近を認める(同上・一四二ページ)。なお、山下宏明『平家物語研究序説』(明治書院・昭和四十七年三月)一〇四—一二二ページ参照。

- (5) 平曲では「句」とよぶ。「章段」の初用は山田説だが、學術用語としての定着は高橋説から。
 - (6) 延慶本は、六巻組織との合成めいた形態になっており、純然たる十二巻本とは認めがたい。
 - (7) 小西「平家物語の原態と過渡形態—本文批判の基本的態度—」(『国文学漢文学論叢』へ東京教育大学文学部紀要第十四輯(昭和四十四年三月)、収録「平家物語」語りと原態—」(『日本文学研究資料新集・七』(有精堂・昭和六十二年五月)。
 - (8) 同右「有精堂版」七〇—七一ページ。
 - (9) 十二巻プラス灌頂巻という構成が、現存四部合戦本での初出だとは考えにくい。この本には、道行文など(巻十・一〇三—一〇四)、和漢混淆文テクストの先在を示す箇所が少なくないからである。
 - (10) もっとも、応永二十七年(一四二〇)五月の識語に「写本事外往復之言文字之謬多之、雖然不及添削大概写之了」とあり(第二中・四四四)、この頃までには延慶本などにも定着志向が入りこんでいたろう。
 - (11) 山下宏明「源平闘諍録管見—其の成立基盤をめぐって—」(『国語と国文学』第三十八巻第八号(昭和三十六年八月))および「平家物語研究序説」(前出注(4)七九—一〇二ページ)。
 - (12) 麻原美子「平家物語の視角—本文系統論をめぐって—」(『文学』第三十八巻第六号(昭和四十五年六月))は、題材面から源平系と平家系とに大別する。質的な観点を導入し、源平系本文を十二巻本以前の段階に想定した有力業績だが、十二巻本以外の形態面とも結びつけるとき、さらに大きい成果を期待できる。
 - (13) 小西論文(前出注(1))一九五—一九七ページ。
 - (14) 山田孝雄・高木武編著「校定平家物語」(東京宝文館・大正四年六月)「序説」へ山田担当(二—一五ページ)。
 - (15) 佐々木八郎「平家物語の研究」(全三冊)(早稲田大学出版部・昭和二十三年五月—二十四年六月)上巻六二ページ。
 - (16) 「乱」は「粮」の宛て字。「乱がはし」を「らうがはし」と表記した例が多い。
 - (17) 南都異本は一〇七四ページ、長門本は二三ページ、延慶本は三二〇ページ。覚一・八坂・屋代・南都・闘諍なし。
 - (18) 後述する「殿下乗合」が意識的に事実を改変しているなど。
- (19) 唱導書の援用を指摘した最初は後藤丹治「平家物語出典の研究(二)」(『国語と国文学』第六巻第五号(昭和四年五月)・収録「戦記物語の研究」(磯部甲陽堂・昭和十九年二月増補版)だが、文体の共通性を論じたのは山岸徳平「澄憲とその作品—作文集を中心として—」(『日本諸学振興委員会研究報告』(特輯6・国語国文学)(昭和十七年十一月)・収録「山岸

徳平著作集』第一卷（有精堂・昭和四十七年五月））が先駆をなす。

- (20) 犬井「内裏への途―『平家物語』巻二「殿下乗合」の作中場所の本文流传―」（『文藝言語研究』〈筑波大学紀要〉19（平成三年三月））。

- (21) 信太周「流布本平家物語をめぐって」（『新版絵入平家物語（延宝五年本）』巻九（和泉書院・昭和五十六年十月刊））一二三―三二二ページに詳細な解説がある。

- (22) 角川源義「妙本寺本曾我物語攷」（『妙本寺本曾我物語』〈貴重古典籍叢刊・3〉（角川書店・昭和四十四年三月）・収録『角川源義全集』第二巻（角川書店・昭和六十二年十月））。引用箇所は、全集版の二三〇―三三三ページによる。

- (23) 佐々木「平家物語の研究」（『前出注（15）』上巻五九―六一ページ。ただし、東国方言の媒介者として信濃前司行長を想定する点には、賛同できない）。

- (24) 佐々木・同右、上巻二〇ページ。

- (25) 武久「平家物語と資経の『自暦記』―延慶本第二次編著者考―」（『文学』第三十九巻第八号（昭和四十六年八月）・修訂収録『平家物語成立過程考』（校楓社・昭和六十一年十月））。

- (26) 同右（『平家物語成立過程考』収録）三二四―二五五ページ。

- (27) 平田「平家物語成立の基礎―編年記事とその原拠について―」（『防衛大学校紀要』〈人文社会科学篇〉第二十九・三十輯（昭和四十九年九月・五十年三月））に初出。武久論文との関係は『平家物語の批判的研究』〈全三冊〉（国書刊行会・平成二年六月）上巻一九三―一九四ページ参照。

- (28) 平田「百鍊抄と吉記との関係について」（『防衛大学校紀要』〈人文社会科学篇〉第二十七輯（昭和四十八年十月））。

- (29) 平田『平家物語の批判的研究』下巻一六八―一八五ページ。

- (30) 武久が「初出十二巻本」という概念をもつようになったのは、昭和五十二年ごろであろうか。「畠山物語」との関連―延慶本平家物語成立過程考―」（『文学』第四十四巻第十号（昭和五十一年十月））に「最初の十二巻本平家物語」という詞句が見えるけれども（七〇ページ上段）、その意味するところはまだ不明確。

- (31) 武久「平家物語と経房の『吉記』―「延慶本」の編著過程について―」（『論集』〈広島女学院大学〉第22集（昭和四十七年十二月））のなかに見える「旧延慶本」（二―三ページ・一九ページ）が『平家物語成立過程考』では共に「初出十二巻本」

と言ひ換えられている。既出論文を単行本に収録するとき、説の内容に変更があれば、その旨を注記することが望ましい。

(32) 武久『平家物語成立過程考』一八五ページ。

(33) 同右・一八八ページ。

(本学名誉教授)